

反革命包囲網打破に向け

6.15大衆の反撃を開始せよ!!

共産主義者同盟(再建準備委員会)
議長 松本礼二

全国の革命的同志諸君!!

われわれ共産主義者同盟(再建準備委員会)は今年の6・15の日を新左翼が70年代闘争を担いきる、そして新たなる組織・運動への質的転換を期すとするとことを呼びかける。

新左翼の敗北と低迷は「沖縄本土復帰」を佐藤内閣によってやすやすとし遂げること

を可能にする最後の障害が取り除かれたことを意味した。そのため、日本帝国主義の沖縄再統合は、沖縄現地を中心とする強烈な反対批判もかわらず、ブルジョアジーのプラン通り進行した。そして現在、新左翼はその政治責任を負わされているのであり、その無能な解答として連合赤軍事件が存在している。そ

して沖縄復帰という政治過程の内実がいかなるものであるかは、ペトナム戦の激化とともに、沖縄一本土の両方における軍事基地の動向によって示される。更に住民の日常生活のものも周辺において、ドル交換問題、物価の上昇にみられるように、僅め耐え難いものにするのであり、日本ブルジョアジーの沖縄統合の内実が、沖縄住民からの奴隸待遇として、すでに急速に進んでいる事を示している。この過程は、沖縄に局限される特徴的過程に止まらず、戦後社会の変換点に立つ日本資本主義の70年代過程の集約過程であると同時に伝統的过程でもある國土再開拓、産業の再構造過程の一部をなすものである。

この過程は、戒場においては合理化の進行

によって、ブルジョアジーの支配秩序がファシヨン的に貫徹することにより、労働者の身体的、精神的な耐え難い疲労をもたらし、その

ような空本の抑圧に対する不満は一切無いとしてくみ上げられないままに、他方では不況といふ掛け声にもかかわらず一定の貨上げは合理化の見かえりとして可能になることによって古典的労働運動は常に労働者の被害をかくす役割を演じているという状況にある。企業内における高い不景気、すなはち、大衆的エネルギーの寡少化は企業内における高い回遊率ではあっても、資本と労働者の対立を解決するものではなく、貨上げの実現する労働者の生活待遇の改善を強化されることによってとりかえされることによってパラソスがとらえられる代物であります、階級闘争の多様化を意味するにすぎない。

企業内階級闘争の体裁は、国家的な物価政策、土地政策の破綻などとして労働者階級から社会が貫徹されている。すでに資本による労働者支配は生産過程における秩序の維持に止まらず、生活全体に及ぼすとしている。言いかえれば、労働力の効率的運用による資本競争のために労働者の生活過程を管理することによって始めて可能となるため、新生活運動から、レジヤー管理に至る企業の労働者階級はさまざまに行なわれてきた。今やそれでも不十分であるため、(国家的)、(資本)

の立場から、労働人民の24時間にわたる支配が意識され、強化されてきている。資本による労働者住民の生活過程での取扱は、総資本、国家の立場からする直接の労働者住民の生活過程の管理の強化を必要としているのである。我々がこうむった30年安保戦争の敗北とはこのような経過の進行そのもので

- 1 -

第15号

- ☆ 反革命包囲網打破
6・15統一行動へのアピール
- ☆ 「後進国階級闘争と世界革命への展望」
—キューバ帰国報告— 松本礼二
- ☆ 5・6政治集会 浅田光輝氏講演
「破防法弾圧への反撃に向けて」
- ☆ 4・17新入歓迎集会 広松涉氏講演
「日本帝国主義の権力再編と革命派の任務」

共産主義者同盟(再建準備委員会)

あり、単なる国家暴力装置の発揚ではなかつたのである。我々がこれまで語ってきた反革命政治的形成とそれによる敗北とは、このようなブルジョアジーの社会的侵略の政治過程としての発展形態であったのである。それ故に沖縄返還の順調な進行というブルジョアジーのプランを許したのは、我々の70年代争の敗北であったと言えるのである。日本ブルジョアジーのこのような路線は、戦後世界体制の伝統以上にもう新たな対応策であった以上、我々の敗北は世界新秩序の一端の高揚とその確立と同質の内容をもつていてことよりもまた明らかである。先進国の学生叛乱は、この伝換期におけるブルジョアジーの政策の矛盾、混乱に起因するブルジョアジーの誤りから噴出した大衆のエネルギーではあっても、ブルジョアジーの基本本線は根柢においてゆりかず対抗力をつけることによってできなかつた。これに対し、戦後世界を分割支配し、革命人民の力を抑圧してきた米ソを中心とする帝國主義の「社会主義」の反革命同盟は、単なる軍事支配秩序の弱さを自認し、ほこりびた政治的支配力を根柢においてゆりかず対抗力をつけることによってできなかつた。これに対し、戦後世界を分割支配し、革命人民の力を抑圧してきた米ソを中心とする帝國主義の「社会主義」の反革命同盟は、単なる軍事支配秩序の弱さを自認し、ほこりびた政治的支配力を根柢においてゆりかず対抗力をつけることによってできなかつた。

我が領における革命發展の主導的責任もこの点から明らかである。インドシナ人民の英雄的抗いによってかろうじて、米ソ・中朝連合体制が人民の革命的叛乱への対応として全面機能することが功がれているにすぎない。

いのである。一方における沖縄問題の進行、他方における連合赤軍の敗滅は現・複雑争の中軸がどこにあるのかを示していく。この対比が示す最も本質的なことは、60年代新左翼が全く現在の階級闘争に答えられない複雑な存在であるということである。反自衛隊カンバニアあるいは、反軍事基地カンバニアは、日帝の沖縄侵略、アジア侵略の全対象をとらえきれない60年代の間にすぎない。カンバニアの実力闘争の極に連合赤軍派があり、今となっては大躍進への復讐を語る様々な革命戦争派は全くの歴史の逆流であり、反効力的向にすぎない。赤軍派にも見られるこのような「大衆主義」実は、組合主義への回帰は赤軍派登場の反面教師的意義を全く無にするものである。連合赤軍派は小さくともどのように武装闘争は組織すればならぬかを示した。だが、右派赤軍派は武装闘争を現在行なうべきではないといつてゐるにすぎない。問題は企業の内部における組合主義的闘争あるいはカンバニア斗争そのものの実效が問題とされているのであって、これを抜きにする課題談義そのものが「争」における反効的回復である。今「大衆へ」という言葉は60年代と同様に語られてはならない。この間の現実が赤軍、武装派批判の正しさを立証してくれた。赤軍、武装派が「大衆運動」を語るごとにによって自らの足跡をつくしてはいることで、すでに勝負はついている。問題は「大衆の中へ」ではなくて、大衆の「いかなる斗争を」が問われているのである。60年代新左翼諸君の懸念は、敵の攻勢を大衆の中へもぐることによって防衛することに向っている。だが我々は、そこに基礎を置かない。たしかに、政治的力関係は、敵の攻勢、味方の防衛であることは明らかである。新左翼党派の分裂と低迷はそこを裏書きしている。だが本当に必要なことは、ブルジョアジーの企業統合平和政策はその外に矛盾を広めさせること以外ではなく、左翼の外の人民の力を引き出さ

せているこの現状を見るならば、ブルジョアジーの矛盾、無望の点を大衆的に攻めにしがけ、敵の矛盾を拡大する攻撃的闘争の建設なのである。敵支配階級の攻勢は60年代新左翼の仲組みの狭きに対して、大衆的反革命をバックにしてしかけてきている。われわれが70年安保戦争として提出した政治的敗北過程の本質は、連合赤軍派の企業的包囲網によるとせんじて誰の目にも明らかになつてきている。治安当局の直接の防衛過程のみによるではないのである。われわれはこのようなくブルジョアジーの攻撃に対して真向から反撃の陣型を形成すべきである。この新左翼の一時代の終焉は大胆に認め、新左翼貢献の棒の伸びを伸ばし、これまでの新左翼のみならず入党者とは無関係に大衆の不満の根柢に依拠し、ブルジョアジーの手から大衆を奪い去る、大衆の分裂を積極的に作り出し、大衆の暴力的暴力を広げつつ重層的に展開されなければならないのである。われわれは、ブルジョアジーが労働者階級を24時間支配しようとするに對して、その24時間の全域にわたって反撃を組織しなければならないのだ。われわれは、すでにこのような70年代階級戦に向けて、党と大衆の政治同盟の基本路線の明確化と組織の転換を大胆に開始している。来たる6・15は、現段の新左翼の混亂と低迷の新たな表現として終るのか、真に70年代闘争を担う部分の戦斗に向っての態勢の転換と出発の日になるのかの分岐となるであろう。

全国の革命的同志諸君!! 既成新左翼の仲を捨てたり、新たな陳列を形成せよ!!

60年代安保斗争における6・15仲は既成左翼勢力の斗争の仲をこえ、国家能力と正面対決を行なった記念すべき日である。この時矢先にわれわれ共産主義者同盟の同志津美香子の生命は今尚、共産主義者同盟の中に受けつかれ、6・15を単なる追憶の日とすることを拒否してきた。ある年は中共との記念行事に対し、

大衆的政治闘争を斗い集会に参加することによって批判し、またある年は、中核、青幹の野合と分裂の中で流産した集会に対し、全国闘争の開始のノロととなった安田講堂突入斗争を個体で斗い抜き、独自の政治集会によってその意味を鮮明にしてきた。本年の6・15は各派の開い込みの極まる道筋として以上の意味を持たされないまま進行している。

われわれはこれに対し、6・15は新たな戦

闘戦列の旗を獲得するかの日とすることを呼びかけとともに、わが同盟の没落勢をどのように形成する出発の日とすることを宣言する。

全国の同志諸君、一切の清算主義的癡想を排し、一切の情主義的党派評価を排し、ブロタリヤー衆の権力への道を建設する大胆かつ広汎の斗争を形成しようではないか。かつてはセクタのカンバニア主義に対し優位を持ったブルジョアジー主義、無展望コロコ主義は今や大衆的反革命として障害物に変化しつつある。又、生産点の闘争を生産点に局限した斗争としてのみ展望するならば、それがいかに戦斗的に斗かわれようと、それが労働者にとって部分的であり、それ故に優位を失くするものにならざるを得ないのである。そして地域での斗争も第二段階として市民民主運営をしてとらえらる限り、これまでの市民運動の無力さを再確認するのみである。

われわれは、生産点での斗争は争別・組合主義的に、地域での斗争は市民主義としてという二元的斗争を主張し、共に階級闘争とし、統一的陣型をつくり出さなくては、これらの諸党派の狭きを突破することは出来ない。

同志諸君 6・15をこのような70年代階級闘争への戦斗的態勢を斗いとする飛躍の日とせよ!! 共産主義者同盟(再建準備委員会)の旗の下、6・15斗争集会に結集せよ!!

「後進国革命闘争と

世界革命への展望」

松本礼二

6.14 共産同政治集会

挨拶：浅田光輝氏、樺光子氏、島成郎氏
基調報告：共産同議長 松本礼二
場所：荏原文化会館
(五反田駅より池上線荏原中延駅下車3分)

反革命包囲網打破

6.15 統一行動に決起せよ!!

5時 磐川公園
(地下鉄丸の内線後楽園下車)
主催 6.15闘争委員会
共産主義者同盟(再発表)

本集会に結集した全労働者・学友諸君に対して、これから我々が抱べき課題について明らかにしていかたいと思います。

我々が今後課題にする一つの焦点は、現代世界に対して、我々はいかなる立場に立つのか、このことを明らかにしなければならない。又、その立場は、ある諸君に言わねば、「この旗の下にこい」こういったことが立場になるとすれば、あまりにもせまい。私たちはもっと広い、もっと多くの、そして最も強烈な部分との対抗軸を建設しなければならない。

私は60年代末における日本の階級闘争が切り抜いたもの。今、浅田さんの言葉を使えば60年以降10年間、日本の学生運動が最も先端に権力に対する事を通じて、60年代から70年代にかけての世界を目の前に取りこもうとした過程、この日本の階級闘争の現実をもって、この現実との対照を持ったところのキューに私は行つてきました。日本の階級闘争と、キューと関係があったのか?ありました。61年から82年にかけてのカリフォルニアの危機の時には、日本の学生が挫折といっていた時代に、少数の部分がアメリカ大使館への抗議行動を展開した。これは単にキューを知つてから抗議行動に立ったのではない。まさに帝国主義の侵略と反革命に対する抗議の行動を自らとりこんだのだ。そして60年代の末にかけては、67年の10.8羽田半歩は、明らかにそれ以前の反戦、平和運動から反戦。反帝闘争へと飛躍する大きな鍵になりました。この反戦、反帝闘争への飛躍とい

う事を私たちも含めて、当時、理解したのは行動においてだけでした。しかし、反戦、平和から、反戦。反帝への飛躍という事は、明らかに、暴力闘争に内包しない限りは、その飛躍を保証されるものではありません。この理解した時に、私たちは、今まで国際主義という言葉については、たゞ思えでしか理解していなかった。(60年代後半における共産主義同盟は、「国際主義」という表現を通して、国際共産主義運動の優秀な現代世界に対する勢力を含めて登場しました。60年代末における国際主義というのは、明らかに「戦後二十数年が平和であった」というのは、欺瞞である。先進場において、「平和・民主・繁榮」の中で、あたかも、世の中和平であるなどといっていた部分は運動されなければならぬという事を行動において示したものであつた。第三世界においては、第二次大戦前も後も、帝国主義の抑圧の前に、自らを解放する為に血が流れている。その事を黙殺する平和擁護運動という事は、明らかに、世界階級闘争に対する欺瞞であるといふメッセージが、O R A S の大会を通じて表現されました。世にいう、グバメッセージです。このメッセージを受け取った時に、始めて、我々が反戦、平和から、反戦。反帝へと飛躍した自らの行動が、明らかに、一国内における行動を通して、自らの行動が世界性を持つもう一段階に入つたことを理解いたしました。このグバメッセージを生み、O R A S 大会を開催せしめたハバナに私は単に旅行者ではなく、行ってまいりました。このキュー訪問

という話は、単に社会主義のキューを見たいという事ではなくして、まさにキュー革命以後13年間、自らの革命精神を挑戦したところ、社会關係、階級關係、そして全世界に対するキュー人民の視点はいかなるものなのか、この事を私が知らなければならぬから、行ってまいりました。そして、そのキューにおける問題という話は、13年間たしかに大。ソの平和共生のはざまにいるから革命が維持できたのかもしれない。そして、カリフの危機の時に、シリシル・ケネディの間に約定があつたから、維持できたのかもしれない。客觀的にはそういう条件をもつていたかもしれない。しかし、グラムマ号から、シエラ。マイストラから、ブライア。ヒロシから、そしていまなお、アンデス連帯を求めて、ラテン・アメリカに革命を向けるキューの中に、私は、私たちが守らなくてはならない数多くのものを持つていると理解している。そして、このキューに残る報告という事すれども、一般的にキューに行つて何をしてきたかというお話をしても私は意味がないと考えます。むしろ、このキュー革命の中で育まれ、今なお追求されている問題が現代世界の中では、どのような問題としてあるのか、私が語らなければならぬ問題として第三世界における革命闘争と、我々の任務という関係において、どのようにキューをとらえるのか、こういう立場から話を進めてゆきたいと考えます。私は「第三世界」という言葉については、いろいろな解釈がありますから、あえて言うなら、ブルジョア用語で言うなら、「後進国」における解放闘争の現在における世界性という立場から解明を試みてみたいと考えます。第二次帝国主義戦争の中で、前進していたところの民族解放闘争というのは、民族の政治的独立、民族国家の確立を目指す。そういう闘いであった。しかし、すでに、帝国主義の世界的な経済、政治、この支配という条件のもと

では、自立する国民経済、こういうものをつくることは不可能になっていた。言葉を変えれば、たとえば一つ、ベトナムの例をとつてみれば、確かにフランス帝國主義が、アメリカ帝國主義がベトナムにおける経済支配を輸にしながらも、民族国家の形成といふことに努力した。年間何億ドルという、経済援助という名目の資金投下を行なわれた。しかし、先進資本主義における生産力が、一国経済のワクを越えて燃焼しており、燃焼している生産物そのものが、市場の問題を通して表われる時に、それは、後進国における経済的自立を促進するものではなくして、むしろ後進国の経済発展を抑止、解体していくものとして存在している事は事実である。この反映が最近、チリのサンチャゴで開かれた後進国貿易開拓を含める会議の中で、一定の表現を使われだしている。このように、解体されたという話は、単に支那関係において解体されたのではなくて、まさに、戦前のベトナムの例をとるならば、農業経済關係そのものが、農民と土地とりあげのみならず、戦場という形を通して、農民の生産關係が解体される。そして戦後は明らかに、民族独立を!という形で解体されたところの国家の治安といふところを、明らかに、軍事的に統合されていくという過程を通して、農民の農民としての解体が進まれていく。経済援助は明らかに民族資本の脅威、こういう過程として表われるよりは、民族資本が明らかに、スイスなり、フランスなり、アメリカの銀行に、その経済援助資金を逆輸入させることを通して、金利生活者に脱落をしている。この金利生活者に脱落するという事は、局部的な部分にしか保証されない。その他の部分は全て、経済過程の解体を通して、自らの生活の廃棄に甘んじなければならない。こういう帝國主義の支配關係が、明らかに、民族独立という表現を通して、大衆的闘争の前に、明らかに軍事的抑圧者として登場てくる。このように後

進国の現状においては、明らかに絶にかいいたような民族独立という事は保証されていない。この事が印度ネシアにおいて、アラバ連合において、端的に示されており、當時、非同盟立と呼ばれた国際形態は、現実の帝國主義と、民族独立を輸する部分とのは根本の中で算体する浮目に会う。帝國主義の全面的打倒への世界的な戦略形態抜きにしては、民族解放が民族解放としても貫徹し得る関係にはいたという事を、私たちは、第三世界の調和性質として、質して理説しておかなければならぬ。明らかにアメエを与えれば、国家的な民族独立を達した安定があるという幻想ではない。

そしていま一つ、後進国における階級闘争という話は、明らかに、生産関係を通して形成する時に、自らを反帝闘争と見做す事を通じて、言葉を変えていよいよ、軍隊という關の部隊形成を通して、その組織を通じて階級形成をさせるを得ない。これが今、ベトナムで闘う解放军や、共産主義的立場に立つて、民族独立という表現を通して、全世界の秩序削除に向けて、戦後世界の秩序削除に向つての頂点にまで出ているのが歴史性であるというふうに私は理説しなければならない。現代における、庶民地帯後進国における革命問題は、今どのくらいの過程で、どのようなものであるかを問われている。この事を私は明らかに認識しておかなければならぬ。

ある諸君たちが、今から10年ぐらい前のよう事を言つてました。「ベトナム戦争はソ連によるロシア革命以後、墓場を作られたとか、反ヌードとか言つてました。しかし、革命が耐えねばならない事を、キューにおいては、13年間少なくとも耐えてきたし、私は今後も耐え抜くであろう」という事を確信している。しかし問題なのはそれをキューだけに求める事は出来ないという事です。その内容に、あらゆる帝國主義、とくにアメリカの経済封鎖と軍事封鎖、ラテン・アメリカにおける孤立、社会主義国の「援助」の中での高額な代價、たぶん、一回の革命を達成した節約が、必ずそれを経ねばならないであろう。現代世界で味わうであろう苦難、孤立、この事をキューは13年間、耐え抜いてきたし、チエ・ゲバラがアンデスの連絡を世界に拡大し、キューの革命の課題として設定した世界革命に向つて開いていくであろう事を私は期待したいと思う。キューの人たちは、みんなのための労働、社会の為の労働、そして人間形成への教育、このように今後動向点を設定している。しかし、労働する大衆が、少なくとも闘う事、建設する事、働く事、学ぶ事が希望であり、願いであり、生活である事を受け入れている事に私は満足してはならない。キューの一つの行動をおこす時

の熱気、その熱気に目の前をくもらせてはならない。キューバの中では、グラシマ号からブリヤ・ヒロンの改革侵略に対して喝った部分というのは、八百万の人口に比べれば、数が少ない。キューバの革命というものは明らかに、マルクス主義でもレーニン主義でもない地点から出発しているのは自明の事であった。しかし今、キューバはキューバ共産党のもとに運動を進めているといううように宣伝されているけれども、そのような一面を持つけれども、逆にキューバの国内では、キューバ共産党が行政機関の中枢を担っている。だからこそ、逆に国内内訌に力点をおく時に、必ず生活は機関を要求するし、機関は自然に成り、機能の内済を要求する。ここに、官僚階級が発達する危険性が含まれている。しかし、これはキューバのみ責任を追求することは出来ない、一国の革命をなし遂げたキューバが、アンデスの連帶を拡大する事を通じて、世界革命の大歴史に向って進むようとする時、耐え抜かなければならぬ内済試験を私たちが理解した時に、次に私たちに任務として何が課せられるのか、それはまさに、我々、反復・平和運動から、反復・帝国闘争への飛躍の過程ではつづりと確認したように、一回の斗いの中に世界の貿易を内包させたゆくのか。言いかえれば、「國際主義」を単なるたてまえ、言葉としてではなく、いかに実践的で我々の斗いの中へ得るのかという間に全力をあげて答えることでなければならない。その間い、答える時にはじめて、我々はキューバ人民との連帯を語る事が出来るのだ。

次に、ニクソンの訪ソ・訪中という形で展開されているブルジョア政治の弱きに關しておわておかなければならない。現在、ニクソンの訪ソ・米・ソ会談に関して、次のような事が語られている。

政治的にベトナムを押える事について、ソ連は約束した。そのかわりアメリカは、撤退

と、北爆をやめる事を約束した。こんなブルジョア政治を許しているという事は、逆に經濟援助という名目の下にブルジョアの安定を促進しようとする部分を、私たちが、いままだ運動の弱さから許しているのだといふ事を意味する。私たちはこの事に対する、自分の責任を負わねばならない。いま一つふれておかなればならない。後進国における革命が、社会主義建設をもし一国的であれ、「可能」にするとしたら、第一の条件は、精神的刺激によるところの全面的な自負を可能としなければならない。その事は帝国主義との大衆の完全な断絶、大衆的断絶をして、そしていま一つは、生産資源から生産手段そのものを一国的に形成してゆくところの条件がなければならぬ。もし、そういう条件がない中で一国的な社会主義を建設できるなどという論理が生まれるとしたら、それは、実際的には世界革命の歎み、あるいは希望の表現以外ではない。この断念、抱きをせるのかどうかという事が、いま一つ我々に問われている問題である。第二の問題は次のように言う事が出来る。帝国主義戦後、中近東・中南米・東南アジア・アフリカ、第三世界と呼ばれているところの民族独立闘争が、中国革命・キューバ革命、そしてペトナムの革命という形で、脈々と革命の脈絡が続かれ、繋がれている。この過程で、先進派といわれている我々を含めての階級闘争という事は、経済発展とともにうようすわけの中で、生活安定を確立していくという一国閉鎖的な志向でしか運動が進んでいない。この事からの脱離を私たちがもたらなければならぬ。そして、全世界における経済過程の矛盾、その事の日本における反映（カコトイ言葉で言えば、戦後帝國主義關係が一定の保証をとったところのIMF体制の崩壊があるとか解体、こういうふうに言われているけれども、解体も破壊もない）今、帝国主義はそれの再編を目指んでいる。解体というならば、自動崩壊にな

る。しかしブルジョアジーは、そんな簡単に自分の支配關係をあきらめる存在ではない。まさに再編を通じて、新たな世界關係をブルジョア的に形成しようとしている。私の言葉を使えば、解体をせず相をせずというのが、各國ブルジョアジーのナショナル議院に臨む姿勢であった。解体をせず、相をせず、先進国がすべて相をせずにはむいたら、明らかにそのしわ寄せを転化されると部分こそ劳动者であり、人民であり、後進国の人民である事は自明である。だからこそ、私たちはこの間、私たちの運営を使うならば、反復・帝国闘争として存在している。私はキューバに行つてゐる間、日本で何が起つてゐるか、ほとんどニュースとしてつかむ事はできなかつた。帰際に、キューバの新聞の中で「浅間における工場占拠」が報道された。私の理解する工場占拠という見解がありますから、ニクソン訪中と、ベトナム北爆強化と、民間における工場占拠と、これはいくら日本の党派が居ても、この世界の局面の中では、あらゆる大行動が強化され、その先端に工場占拠、武装闘争が位置づけられたのかといふ事を理解した。ところが帰ってきたと全然違う、笑い事ではない。問題なのは次の事にある。それは階級的実践の側から見一されなければならない。先進資本主義における大衆叛乱、後進国における民族解放社会主義革命戦争。そして、ボーランド・チコ、こういう形で進行していくところの「社会主义圈」この中におけるところの大衆叛乱。そしてこれらの叛乱というは、一般に、偏別性を持って開拓されているけれども、その正体は、ペトナム革命戦争が明らかに頂点的に表現しているように、戦後世界秩序統体に対する、反抗として存在している事を体は表現してきた。「社会主义共同体」東欧圏と帝國主義による共有体制への反抗という事は、明らかに、我々が東欧圏に参加してゆけば解決する問題ではなくて、東欧圏そのものが乗りこえられる対象として、いま世界的な統一性をもつて、始っているんだという事を我々は表

- 9 -

党が革命を尊ぶのではない。大衆が革命を準備するのだ。その事を理解しない部分がはじめて、銃薬が正しくて、リンチがまちがつてゐたなどという形態的な締結しかない。大衆が求めているのは、そしてもう一人民が求めているのは、反権力闘争を燃然に斗いく抜く部分への心情的共感を持つ事、それが切腹振舞している事に対して、総括を通して、我々が答える事である。この時に私は言おう。たぶん、組織を作ると必ず組織は絶対に正直して、我々が全責任をとるんだと言わなければ、なかなか組織を作らない大きな問題であろう。このように考えています。こういふ私たちが、從来出来立たんとして、獲ちとてまた自らの見深らいうものが、今、ふたたび問われようとしている。

眼を凝じて言ひなれば、ペトナム、インドシナ、これは南政府の危機、グエン・パンチエの危機として表現されているし、アメリカの北爆強化という形を通過して表現されている。世の中をブルジョア政治の構の中からしか見ていない部分、今まで私は、私たちにもそういう危険があるかもしれない。今の段階で言ひなれば、うねねと通して言ひなれば私たちを除いた他の部分は、ブルジョアの政治のからしかこの事を見ていません。問題になるのは、ニクソンの訪中によって、ペトナムが取り引きされるのではないか。こう言つていては、必ず少なからず存在する。だからこそ、スターリニスト・帝国主義の代の競争争争々という事が今一度である危険性をもつて表われている。そんなブルジョア政治は、ペトナムの傀儡で否定されてゐるという事です。我々が表現してたように、戦場が作り出した政治は、戦場において決するより以降にないという事を今ペトナムが明らかにしているわけです。そしてこの戦場が結論を出す事に対して、ブルジョア政治は完璧にゆきよられてゐる。ましてや、ブルジョア政治の構の中でから現代革命に対応する力を持つてゐるという言葉だけが潜行する。組織が軍隊を作るというのは、明らかに人民抑圧の武器を、ブルジョアジーと共に自分もつと事を意味する。人民が自らもつとものを防衛する時はじめて。その第一線に自らが立つとき、その事こそ私たち人は軍の軍隊という表現を使って、自らの部隊をその先頭に立たせるであろう。

る政府がある。たしかに人民戦線政府といつかないという事を言っておかなければならぬ。この内容こそ、今まで言いふろされた言葉で言えば、党と大衆という言葉の対応として我々が解明しなければならない大きな問題であろう。このように考えています。こういふ私たちが、從来出来立たんとして、獲ちとてまた自らの見深らいうものが、今、ふたたび問われようとしている。

眼を凝じて言ひなれば、ペトナムとチコ・ペルーにおいて、人民連帯機関が、ラテンアメリカを北爆強化によってソ連連帯を形成されようとしている。五年前、チ・ガウラが言つたアンデス連帯を通じた南北アメリカの革命という形が、いまようやく実現の途に上ろうとしている。この事は確かに、ハバナとサンチャゴとペルーの問題ではなくして、ボリビアであり、ウルグアイであり、エクアドルであり、アルゼンチンという形で発展するのは、ラテンアメリカの構造を見れば一目瞭然である。従つてその一方で、ラテンアメリカにかねてアラメダの支記に対する、ブルジョアのこれまでの抗争として治つてゐるが、それがハバナとソ連連帯を成立させていくという事を我々は理解しておかなければならぬ。問題は、この活動の発展を促進する為には何が必要なのかという事を、我々が行動において示さなければならぬ。

いまひとつ、中近東を見た場合に、アルブタを中心としたところのアラブ解放陣営の斗争がある。この闘争は從来、イスラエルを中心にしての解釈戦線、このような性格を持つてゐたけれども、現在においては明確に変化した。ヨルダンのセイキンを中心としたアラブ王政連合構體といふものが出来上がり、印度された人民の解放はまさに、アラブの非同祖連立連合そのもの解体の事を通じて前進しない限り、解放戦線の獲得目標はブルジョアジーの側に在るといふ事である。

- 1 -

ジョア的にしか収約されない。この事は、帝國主義に対する屈服でしかない。屈服を拒否する限り明確に、アラブの石油資源とスエズ運河は、革命と反革命の焦点として、いま一度突きあがめる事は必然である。

カンパチアを軸にしたインディシア解放戦線と、タイ、ビルマのゲリラ、解放戦線の闘いが展開される。そしてインド亜大陸におけるバングラデッシュが形成された際に、革命的、準革命的部隊に革命をしにくングラッシュの性格といふのは、いまいちど解体の対象としてあがらざるを得ない。バングラデッシュにおける経済危機と社会危機は、不可避的にインドにおける経済危機、社会危機を生まざるを得ない。そして中南米におけるアラブ王政との革命的戦争が展開されるが、第三世界の革命と呼ばれている表現はそのまま日本の、ヨーロッパの、アメリカの帝國主義本國における階級闘争の責任を明らかにして現れてくる事は自明である。我々はそういう階級闘争の真偽の到達点が明らかに表われてこそ、このものとしてこの間、NATO、安保、ワルシャワという同盟条約、冷戦構造の中で組まれたこの同盟条約が、明らかに世界階級闘争大軍團に対する抑止戦略として力点航行を開始している事を表現してきた。まさに全世界の人々を抑止する構造を、ブルジョアジーの側が実行して形成しようとしている。我々はこれに対する闘いなどの地点から始めなければならぬのか。この時に大衆闘争と全く無関係に、言葉をかえてしまえば、革命と無関係な自己擁護的、自己満足的運動は脱皮されなければならない。

知らない。しかし現状から見てそれが伝宣であり、また米・ソの政治解決、密約談に対する、パリ会談の秘密交渉におけるアメリカの懐柔に対する対応の歴を仄に示出ないとしてもこの放送が持つ意味は、アメリカ帝国主義とグエン・バン・チューカイライドの全面敗北の近い事を、少くとも明らかにしている事を我々は理解しておかなくてはならない。まさにアメリカ帝国主義は全面的敗北を表現せざるを得ない。1954年におけるディエップエンバーが、ジュネーブ会議としては今回絶らない事を明らかにしている事を理解しておかなければならぬ。この放送に対してサイゴン政府は、全公務員に対して、自衛組織を結成するよう命令を出した。武器を手渡すたる必死の意である。政府を防衛する為に必死になるて公務員に自衛組織を呼びかけたんとと思う。しかし、政府の職員には呼びかけられた歴史の任務に、グエンバントーは守れとの方針は対抗力を持て得ない事は自明である。渡された武器が必ず、ライ政権の倒壊と、アメリカ帝国主義打倒の武器に転化する事を、私たちは全面的に人民に対する信頼を通して確認してよろしい。聞いといふものとそのように思われるものだ。そこで私が守らねばならない事に対する反抗ははならないのは、このようないき面に對して、私たちの中における混沌を脱皮しなければならない事だ。先ほど、浅田さんも表現したように、60年とは異なり、今こそ、革命主義への形成に向っての任務が明確している時はない。ブルジョア政治に右左往來する事やめ、歴史の衝撃が私たちに革命主導たる事を求めている時に對して、私たちは全面的に解答する立場を堅持しなければならない。そして、その事は、連合赤軍が誤っていたから、闘争の力を弱めてよかっただけでなく、闘争の航船を弱めていい事にはならない。權力の攻撃が先鋒になればなるほど、闘争の力と闘ひの場は拡大されなければならない。そしてこれは、

「色々なところでの闘争があります。そして私たちはその局面、局面に参加しています。」では、これは意味を持たない。問題のものはその局面と部署における事が、いかなる質を持つて現代の世界に対する関係を持つていろかを明らかにしなければならないし、そしてその理解の上に立った行動が最も進歩に、そして最も戦勝を広げて形成されなければならぬ。大衆に迎合する事ではなくして、大衆と共に歩む事である。そして大衆闘争をひきずるのではなくして、大衆と共に歩むという事が確認されなければならぬ。我々は、闘いの陣を構築する前に、後退しようという劣勢気が生まれている事に対し、屈服していくのだろうか、いまひとつ、アジア人がまさに勝利への一步を歴史にとどめるべく進んでいる時に、我々は帝国主義ブルジョアジーの前に、後退する事をとめていいのだろうか。そうではない。後退するのではなく、ブルジョアジーに屈服していくという事に対する反抗はすでに始っている。地盤で、改良運動、このように否定の対象にされた部分は、いまや帝国主義の社會再編という言葉が示している、權力再編に対する自己の欲求をかけて運動を起そうとしている。そして先ほどの浅田さんの言葉を使えば、反動、弾圧、この事は単に反動と彈圧にとどまらない、まさに權力支配の完成過程に対する闘いの対象にたとうとしている。そしていまひとつ、我々は数年間沖縄闘争を表現してきま。しかしその沖縄闘争は、帝国主義の政策に劣る、反政権闘争以上の域を出る事があまりにもなかつた。いま5月15日を通して、支配体制のセレモニーがある時、この5月15日以降、明らかに沖縄人

民が沖縄人民として闘つた戦後二十数年が、我々の闘争によってどのように答えられなくてはならないかを如実に自らの闘いとして問われている。我々はたぶん、諸君の協力を得て、全組織力をあげて、討議するだろう。沖縄一ベトナム一我々という関係が、いかなる世界性を持った結合關係を通して、70年代における帝國主義打倒に向けた全戦線を形成するか、その第一歩として、我々は5・15、そして6・15は全權力の力量を誇けて吹ききしている見駆面を転換させ、權力に対する反政権を全力を傾注し翻い抜くであろう。權力の支配が強化される時には、必ず權力に決定的な弱点が表われる局面の證拠でしかない。この弱点を見抜かない時、我々は歴史的後退をせまられるであろう。しかし、我々がそれを理解した時、我々は權力打倒へ向けての陣型構築が始まる事を確認しておこう。

共に闘う事を誓って終ります。

5・6 政治集会浅田光輝氏講演

「破防法弾圧への反撃に向けて」

社学同の諸君と共産同の再建準備委員会の赤ヘルメントの諸君の前に出て、こういふお願ひをするのは、恐らく、5年ぶりぐらいだと思います。別に私が諸君の集会を毛儀もしかのではなくて、諸君が呼んでくださらなかつたので、今呼んで頂いて、たいへん難しく思っております。

今、私がまだ当面している事態について、私なりの考え方を申しあげて、諸君の御検討を得たいと思います。今、我々が当面している事態といふのは一言でいえば、とにかく混沌たる状況であると言えば聞こえがいい。どうも、語彙があるかもしませんが、いた詰つか状態であると私は考えていました。沖縄闘争、これは、日本の軍国主義と帝国主義化に向けての、70年代に対する、闘争であると思いますが、沖縄闘争は、昨年秋からそれにかけての国会批准の時期で終わってしましました。そして後、今日までは、本土の労働者、学生ではなくて、沖縄の労働者、学生の闘争のみが、歳次に跨われていました。彼らは眞面目で、この状況を私たちは傍観しなければならないといふのはためにかちあつたままです。こういふ状況が5月1・15日の「返還」の日以後をむかえていたいどういふにかかるのか、「返還」の日をむかえて、おもつくは、日本の労働運動も、学生運動も、焦点になくなつたといふ事で恐らくは混沌するでしょう。その後、混沌の状態が喫くのではないか、眞面目な状況が続くのではないか、眞面目な状況が続くのではないか、といふ事を私は、恐れるのです。しかも、2月末の10日間、日本を震撼させた10日間、あさま山莊事件は、これは、日本の戦闘的左翼の集団になにか一齊に沈没ムードをもたらしたかの

ようあります。そりでなければ幸いですが、私は、新学年度になって、「新人歓迎集会」というような大学のあつまりに招かれて、いくつかの大学を訪問しました。しかし、そこでもられるのは残念ながらそのようにな沈没ムードであります。先ほど、学生の方の報告、アピールがありましたが、ここに来ておられる学生諸君はいかがですか。みなさんの大学ではいかいといふ状況であるが、どうも残念ながら、今、我々が当面しているのは、60年安保の末日本の中学生運動全体を契機に沈没ムードときわめて相似した状況ではないかといふふうに思われます。しかししながら、60年安保の後の挫折のムードの時期は、日本の高度資本主義下の集中で学生が直面した挫折の状況であつた。しかし、私が当面している日本の情勢は決してそういう状況ではない。60年代は高度化が進められ、その高度化があつかも、永久繁榮であるのような幻景をばらまき、しかしそれは60年代以来進行したドル危機中に日本経済は停滞されて、その中で今日本は、深刻な持続する不況という状況に直面している。そして、持続する不況の中で大規模な高揚がおこる可能性が作られている。客觀的状況は、そういう状況だと思います。しかつて私どももいま、60年安保闘争の直後から日韓闘争までの5年間挫折のムードが続いて、学生は挫折といふよう言葉を言う事が何かカッコいい事であるかのようなそういうムードの中にはまりこんでいか。そういう5年も6年もという長い沈没は許されない。情況は日々に急劇変化しています。アメリカのベトナム戦争も、これは言葉は同じでありますけれど挫

折した。そういう中で日本の反動化が極端に、急ピッチで進もうとしている。そういう中で、我々は腕をこまねいて、挫折や沈没に静かにされません。つまり、私どもの主体が立ち直れているという事です。一言もってすれば、そういう事では私は今これから、わずかな時間、諸君に、今の状況といふものについての私なりの考えを申し上げないと思うのです。

私は、破防法時代がよいよ本格的に始まると思っています。御承知のように警察的な弾圧が、戦闘的左翼の集団に集中的にあびせかけられてはじましましたが、60年代末の、反戦、反權力、反軍国主義闘争の鼎擧の時期からであります。つまりそれらを括して、70年安保闘争といふよりらしいが、都条例の第三条といふのは、御存知かと思いますが、安寧秩序を害する恐れのある場合のほかは、集会、デモを、許可しなければならないという、「許可しなければならない」という事は定めた箇条です。それをおばねでないと、それは私の見ると、昨年の秋から冬にかけての、返還協定国会批准の時期において、警察の弾圧は更に、質的変化をとげたと思われます。この質的変化を私は破防法体制の始りであると呼んでいるわけあります。これは一口で言えば国家の反動化でしょう。しかも私の見ると、昨年の秋から冬にかけての、返還協定国会批准の時期において、警察の弾圧は更に、質的変化をとげたと思われます。この質的変化を私は破防法の始りであると呼んでいるわけあります。しかし、この質的変化はどうなもので、しかばねの質的変化をとげたと思われます。この質的変化を私は破防法の始りであると呼んでいるわけあります。これは一口で言えば国家の反動化でしょう。しかも私の見ると、昨年の秋から冬にかけての、返還協定国会批准の時期において、警察の弾圧は更に、質的変化をとげたと思われます。この質的変化を私は破防法の始りであると呼んでいます。これも、時間があります。この質的変化を私は破防法の始りであると呼んでいます。これが單に第三次破防法の発

軍と書かれたが、ハルメットが棄業されてしましました。ビルがおかれていました。その他の点がほしい点が多くあります。これがいかつい戦闘的左翼のあらぶ部分が行う行為であるかどうか。そういう馬鹿な事を一段にはないでしょう。自衛官殺害はあるかもしれない。しかし、殺害した現況にあわざざ証明を残していくといふのは一体どういう斜見なのでしょう。これは少なくとも、我々の事件ではありません。この件はかりえの事件ではない。その事件が起つて、やがて翌年1月に7人の容疑者が逮捕された。その7人の容疑者の逮捕によって私はこの奇妙な事実の奇妙な始まりがあつたと思っていました。ところが今年1月になつて7人の容疑者と関係があるという事で、ジャーナリストや、あるいはそのジャーナリストと関係のあるという事で多くの知識人が家宅捜査をされ、任意出頭命令を受けたという事態に、思ひの方向へ発展してきました。この過程において朝日新聞が家宅捜査を受けた。新聞社が家宅捜査を受けた。しかも朝日新聞の明日マーチャーの記者が逮捕されたという事で、これは新聞社と編集部の許可によって7人の容疑者のうちの1人と取材活動の為に接触していたという事であつたのです。にもかくらず、朝日新聞社は、自社の記者がそのように取材活動の為に逮捕され、しかも、新聞社自体が家宅捜査されているにもかくらず、逮捕された記者を首にしめた事を新聞に発表しました。これは、自主規制を天下に表明しき事柄にはならない。新聞社は権力に屈服しかけています。言論活動にこだわる多くの知識人の家宅捜査も同様な意味を持つものであります。つまり戦闘的左翼に対する直接的な攻撃という事が今まで行なわれて来たが、ここで一転して、その周辺にある言論機関や、言論者に対する権力の圧迫を加えるという事にはならない。そしてこれに行なって去年の暮から今年の始めにかけて、東京都内に、さまざまな形での爆弾さわぎが起

ったのです。この中には明らかに、諷刺とし考えられないような事件も含まれています。この事件と共に並行して、京急、埼玉周辺において、みなさんが、アパート、ローラー作戦と呼ぶ、奇妙な、住民を巻きこんだ警察活動が行なわれるという次第です。そしてそれらの連絡として、(説話という言葉は愛称でありました)茂山山荘事件が起つた。茂山山荘事件で私がもっと強く感じた事は、涼山の行動が頭にあらざらないとかという事例上にこの茂山山荘事件は警察がデラックスショーアーであるという事です。この事件そのままのまま警察を作りあげてまでは私はしません。つまり、今までの、そういう事件で際会して警察はこれを最も効果的に国民に伝達する為に「一大ショーアー」を展開しました。その「ショーアー」を展開するにあつて報道機関を全面的に動員しました。

「この後、浅井氏は一体化しある権力と報道機関がいかに巧妙に「ショーアー」を作りあげていつかを氏の軽井沢での見聞をはじめて具体的に描寫されると、更に、「混沌赤軍を育成した知識人との批判」という形で、言論人にに対する有形、無形の撃沈が、権力・マスコミをあけたてられていました。また日本共産党中央委員会赤軍派に対する攻撃は彼らの秋葉原国民党、体調内政党ぶりをますます明らかにしている事を述べられます。>

次の事を我々はいまはっきりと認識しなければならない。権力に対して戦闘的闘争を開始すれば、これはどうしても大衆的な日常生活というものの、日常の利害というものを、否定する事が多くなる。そしてそれは少数者の運動になる。他方において大衆化を志さず、されば、どうしても、戦闘的闘争といふは先がちにぶる。そして大衆の日常的な利害に対するせざるをめぐらなくなる。これは昔から今まで社会運動の中の二つの潮流を矛盾ですか。社会運動にこだわるものは誰もそのような矛盾に、どの時代にも、みんな当面してい

る。明治末において、幸徳秋水と片山潜の対立というのも、幸徳秋水の左派に対して、片山潜の右派といふの対立があつたというのも、この矛盾の表れです。さらに十九世紀末から二十世紀初頭のロシアにおいて社会民主労働党が当面した問題もやはりそそだつただろうと思われます。メンシエビキとボルシエビキの対立、そういう中でとえばボルシエビキは、戦闘的闘争を大衆的な形態で、貴いてゆく事に成功した。あるいはその逆ですね大衆運動を結集しながら、その中に戦闘的な質をもつて、そういう闘争を彼らもあえて行なつとして、それで少なからず革命を起しする力量を持つことで成功したという事が言えます。我々が現状において当面しているのはまさにそういう問題ではないのか。そういうふうに私はこの赤軍の問題を終結しなければならないとかわから思っておきます。赤軍の問題は、私は、殘念ながら、日本のニュースレポートの運動の中にあつた性格というようなものを、一つの質というようなものを、彼らなりに、最も正確に、抵牾して表現して、そういうようなものではなかつたと思ひます。しかがつて赤軍のあの事件が起り、その後、リンチ事件という問題が重なつて、その間、多くの党派は寂として声なし、というような状況に陥りました。皆さんはそれを総括しておられると思いますけれども、しかし、やはり心の奥底では、多くのためらいや、やりきれないさというようなものを強くおもいでしまう。やりきれないを吹き飛ばしてしまつたら、これは私は、そういうような結果は本当のものであると思いません。(例えは、車マルのように、これは問題ではない)やりきれない、というのがあつたのです。何とかわらず、それはしなければならない。そして60年代の闘争を日本の人民の先頭に立つて戦ってきた戦闘的左翼の運動のひとつ、この時期における展開の方向といふのを私共はこどもでありますと、丁度全共闘運動のあの時期には、古

典的なゴリゴリの公式マルクス主義者だなんていわれたのですが、しかしその時期に私は、日本の高度成長は行き詰まるということをいつづけてきました。これは経済の論理からいえば当然なんですね。その行き詰まるという時期、その行き詰まりがどんな形で行き詰まるのか、どの日どんな時期に行き詰まるのか、これは予言者で古いいき止め以上、つづきしりこをいきなはないのは當然なんですね。しかし論理の必然的な結果として、資本蓄積の限界に対する不況を解消するなどということはあります。その状況は69年末からはじまつたといふことです。そして日本は持続する不況の波の巻きつきを離されていました。それがひと口で申しますならば、第二次大戦後の資本主義世界体系に相対的な安定の時期が後づきといふことにはならないと思います。

資本主義の変動の時期がはじまつた。この変動の時期を革新的の時代にするいかないかは革命主体の方より多くかかることがあります。もじこの時期に、我々が革命主体を結集するところがなければ、恐らくは、日本の状況、世界の状況の停滞しかしてその停滞は停滞しながるといふまでいつまでも続くでしょう。そしてその苦しみは人民大衆一般に広がっていくでしょう。帝国主義と植民地の関係も同様です。

そういう状況を一転して革命の時期にならぬか否か、これは革命主体があるかないかにかかる。その革命主体はいかにどこに求められるか、私は労働運動だと思います。

労働運動は先程申しましたように経済成長の時期において当然のことながら日常生活に埋没した。しかし日常生活に埋没した時期の有力な指導理論であつて民衆の理論といふものは、もう今後は、おそらく彼ら自身も維持できまいでしょう。例えば、民衆の左派の諸君が統計を指導していて、1964年、1965年と経済成長の不況が日本に訪れた時期

があるんです。過剰生産恐慌ともいいくべきそういう状況が、昭和39年から40年にかけて、日本にありました。これは恐らくは日本の経済成長の資本蓄積の論理が不可避的に導き出したそういう矛盾の爆発であつたと思うんです。

そして、65年にベトナム戦争がはじまつて日本で戦われたんです。そしてその後に輸出先导導の超高度成長の時期がはじまる。つまり外在的にこの不況は救済される、ところがこの64年65年にかけての不況の時期に当時の総評は春闇の時にどういうことをいっていたのか、「日本の経済が不況であるといふことをいふのをせせ」と労働者に説いていたんですね。不況というのは資本家の宣伝である、資金を抑制せざるを得ないための資金の宣伝である。それに乗るな、といつてました。資本主義を批判し資本主義を否定する労働運動がどうしてそのように日本の不可避的な法則結果である不況を自己説めているのか、不況があつてはなぜ労働者が困るのか、なぜ好況が持続されなければならないのか、資本主義が好況のままにいつまでも進むことがなぜ労働運動にとって好ましいのか、望ましいのか、これはまさに奇麗な發言であつたと思います。

これは太田ラッパが當時いつか言葉です。太田ラッパは不況というは資本家の歌謡であるといつてます。そういう労働運動の指導者は資本主義の分析なんてできません。この民間理論の根柢は今と明瞭ですか。民間理論といふのは好況時における資本の込んだりの、あるいは消費労働力の商品の販売リストですね。これが民間といふの本質、経済といふの本質です。さてそういう状況に我々は今さしかかっています。この状況において私は学生運動が持続してきました革命の気塊を労働運動の中に本格的に展開したい。そのために共産再建準備委員会の諸君を中心になって闘わんことを期待します。以上で終わります。

-1 6 -

4・17 新入生歓迎集会広松涉氏講演

「日本帝国主義の権力再編と 革命派の任務」

現在、私どもが一つの歴史的な転換期に直面している。しかも恐らく世界史的大尺度を見て、大きな転換期を直面している。こういう事は諸君がすでに経験しておられるところどころであろうと思ひます。私は、今こそついでわゆる国際情勢といはし、国内情勢、こういふかの分析に立ち入りつもりはありません。しかし、日本資本主義が当面している経済上の不景氣とその構造的矛盾の有機的な一環であります。身近に言つてしまえば、IMF体制の下で、アメリカ経済が、直接的な取り引き分野だけで見ても、日本の对外経済の四割といふエクスポートを占めるという従来の構造がもはや維持出来なくなつて來ました。こういう事態に源流していきます。さあかくては、国際的インバウンドによって矛盾が露呈して來ました。こういう事はあらためて私が指摘するまでもない。なるほどいろいろな調整措置を取る事によって、アメリカ国際経済、ひいてはIMF体制の手をなしといふような事が試みられるあります。それなれば、いよいよ今までのような成長経済といふのはまったく不可能になります。私はここでかたじけなく、破局の恐慌がせまつてゐるかそういう事を言つたりはありますけれども、今まで高騰成長を前提にしており立っていました。日本の政治、経済、労働問題の問題で申しますと、いわゆる経営者側と労働組合との取り引き体制、こういった事を含んだ債務、それからまた、大衆の政治的、社会的諸契約を含めた全体系が、もはや、今までの形では成り立たない、そういう局面に来ているわけあります。日本の政

-1 9 -

してしまうという事はないと思いますけれども、中ソとの関係それから、東南アジアを中心とする、いわゆる後進諸国との経済関係はここで大きな問題になってまいります。日本資本主義は、と申しますよりもこれは日本といり國に規定されか条件といつてもいい面もありますけれども、日本は、石油にしまして、鉄鉱石をしまして、それこそエネルギー資源から工業材料に至るまで、ほとんど全てを海外から求めざるを得ない。海外資源を加上し製品化して国内での消費にあてると同時に製品の一部を輸出して資源を輸入する為の外貨をせざる構造であるわけで、現に経済規模の拡大とともに、日本資本主義自身がいわゆる開拓投資を行なう必要が生じて来ました。60年代の後半から、東南アジアその他の対外的開拓投資が飛躍的に進められても、何かわけであっても、資本の論理から言えば、いわゆる共存共栄をかけてゆく、といふ事を言っているわけです。現地の支配者階級のイデオロギーにおいても、それがある程度受け入れられるといふ可能性が今とある。しかし、東南アジアにかぎらず、階級分離が進展するにつれて、どうよりも先進資本主義諸國の帝国主義的な進出に対する、抵抗、闘争がもたらしてござる見えない現に、新聞その他の、あまり報道されませんけれども、ミニアジの周辺の政治といふものが充分に保てない、フクダの再建という状況がある。それから、マレーシアについて、これはある程度報道されておりますから私がここで申すまでもあります、インドネシアは理念ながら今のところおさえこまれているようありますけれど、ビルマでも、ラーンマー周辺で武力解放闘争がかなり進展している。日本の新聞でセイロントですが、こういったところの報道は断片的に出ておりますけれども、東南アジア全体でどういつか風に情況が進展しているか、という事についてはあまり報道されませんけれども、一つだけ端的に事例をあげ

-20-

とも、今後、日本帝国主義の開拓投資が進んでゆけば、現地における支配階級と被支配階級との矛盾が激化してゆくかもしれません。今までこういう事が言っていたか、「高成長もいかねてはいるような状況でありますから、日本資本主義としては、そこでの開拓投資、それから、それを手引きとしかどろの商品輸出市場を確保する為には、どうしても政治的介入、ひいては武力的な介入というところまで、射程距離に入れた進出を促進していくかざるをえない」とこと70年代安保というものが、50年代安保はどちらんのこと、60年代安保ともちがう条件があると思ふうすけれども、とにかく、日本としては、そういう形で進出していくといふところまで具体的に考えざるをえないし、それに応じた国内体制の再編をやっているかざるをえないと思っていている。しかも共産闘争というのも、これまで經濟の論理からして考えざるをえない。ところが共産闘争といふのは、資本といふ限りは、資本の論理です。ようありますけれども、これは単純に資本の論理だけではない。ことに日本の友好大が大衆としてくるといふ事になりますと、これは日本の体制側にとっていろいろやかましい問題が出てくる。こういう國際經濟の情況といふのに規定されて、かだその一点からだけ見ても、体制側としては、ここでよほど路線を切り換え、しかも強力な権力的、イデオロギー的な支配体系をうみのを作っていくかざるをえない局面にきている。

ところがこれは単に、対外的な関係だけの問題では当然ないのであります。国内的にも、今までの形での高成長経済を続けてゆく事が出来ないといふ事になれば、いろんな矛盾が当然出てくる。私、今ここで農業の問題といふ事について具体的に指摘したり、あるいは、公害問題といふものから見て出て来ている一連の問題についてふれる事は割愛しますけれども、一つだけ端的に事例をあげて申してみたいと思います。それは日本経済の具体的な問題ではなくて、意識構造にひっかかるべき問題であります。今までこういう事が言っていたか、「高成長もいかねてはいるような状況でありますから、日本資本主義が、現在当面している路線、情況といふものが、非常に体制側にとっても深刻な問題である」という事は御理解いただけますと、私はここで、ただいまに、古典的な形でのアシズムですが、これがまだ古典的な、教科書に書いてある通りでの警察国家ですか、こういつた事はすぐ出てくるといふふうには、ストレートには申しません。体制側としては、事情が許すかぎり、もっと巧妙を形での体制内統合を目指すであります。それはもう一つは持ち家と申します。家の問題ですね、建物の問題です。この両方がからんで収入がもととなる事に対する意向が非常に強い数字で表われて来た。今まで、ちょっと傾向の違ったデータが出て来た。つまり、単純労働もいたけれども、もっとやはり収入が欲しいという事が非常に表面的に出て来る。それからもう一つは持家と申します。家の問題ですね、建物の問題です。この両方がからんで収入がもととなる事に対する意向が非常に強い数字で表われて来た。今まで、それがほど表面に出でて来なかったのが、何故で来たのかと言えば、これは社会心理学者の分析ですけれども、今まで、賃金これまでいいというふうに思っていたのではないか、毎年春闇以来、体制の賃金が着々と進めてきた一連の施策がいかに結果につづるか、偶然なるものがあるわけであります。この點、あえて留意を促しておきたいのですけれども、権力の側のとういう体制固めが、佐藤内閣の末期的な症候、つまり佐藤内閣の指導力がかなり弱体化しているという情况下において、にもかくわらずここまで進んできているという事は、これからあと強力な政府権力が樹立されるならば、もっともっと強力な権力体制、かつ巧妙な体制といふのが固められるであろう。つまり佐藤内閣にあって、もっと強力な民主党新内閣が成立した場合には、権力の統制がいよいよ

-21-

強化され、反体制運動に対する弾圧がいよいよ大きくなっています。しかし、せしめる所から、いつかいつかの意図を促しておられた、この事であります。

反体制運動のための大衆的闘争といふ事は残念ながら、今だ、可能の範囲とどまつておりますけれども、体制の側が非常な危機感を持っていますといふ事は想当然に思われる通りであります。考えてますに、この20年以上の間、自民党政権といふものが一応安定的な支配力を保ってきたところが、最近の一連の地方選挙選出などは、地盤への国民党の勢力後退が見られる。これには、なるほど、佐藤の末期といふ要因もありましょう。私は、次の選挙あたりで自民党が過半数を割るというような事を言うつもりはありませんけれども、ともあれ、70年代もそう遠からぬうちに、自民党が過半数を割るという事は体制の側でも、もう計算し始めていました。もちろん、現在のようすは公認といふものが、そのままの形で続くとは考えられませんし、体制側としては、たとえ自民党的単独政権といふものが維持できなくなつたとしても、連立政権で乗り切るか、いろんな事を考えていると思いますが、しかしして、この体制側の、危機意識を持っているといつても、本質的にはまだ多少の予想と違うものは、大衆闘争の爆発的爆揚がおこらないという前提のもとで、はじめて成り立つものであります。もしも、大衆闘争の爆発的爆揚があれば、話はまったく別になつてくる。私は、近い将来に大衆闘争が爆揚して、それがそのまま革命にまでゆくというような、そんな甘い事は申しません。体制の側としては大衆闘争の暴動に対して、一方では弾圧を防ぐとともに、旧左翼及び、まだまだ議会主義に対する幻想を抱いている大衆に依拠し、議会主義の土俵で大衆を誘導しようとするありますとか、この間のフランス

の後ですか、こういった事の故を引きあいに出すまでもなく、容易に推測できる事ですが、しかし、体制の側のそういう手練手段が、現在の状況では、なるほど、残念でありますけれども、一応ある程度成功するといふ可能性はかなり大きい。しかしながら、それでも何かわらす、新左翼が、どこまで力量を増やすか、そして大衆闘争の昂揚の質をどこまで高めうるか、これによって最終的には決まる事がありまして、大衆叛乱の質と一定の昂揚といふ事、これと革命の勝利といふ事の間に多くの媒介項がありますから、私どもとしては、決して、甘い見通しをたてるわけにはいきませんけれども、しかし、新左翼がよほど組織的力量と、大衆の結集力を培っていないければ、大衆の叛乱とよそ一時的に席捲したとしても、議会主義の水路にも一度度走らしめられる、こういう事の公算がいくら大きいといつても、しかしこの頃、たとえ、新左翼が真に最終局面まで運動を領導するという事が出来ないとしても、体制側にとってから政治的危機の情況といふものを借りり出しうる可能性といふものは現にありますし、こういう情況であればあるだけ、体制の側としては、来たるべき大衆運動の高まりに対して、公然たるダブルトロットによって、あるいは、それが困難とみるや、それこそ、フックの手筋に訴えてでも、鎮圧してくるであろう事は予想されるわけであって、我々が大衆運動の一定の昂揚の容認的条件があるといふ事を言う事は、単に衆矢的に議論を進めるがためのものではなくて、瓶の反面としては、ここで一步、我々が取るならば、それこそ長い冬の時代も、あるいは、経験せざるをえないといふ事、かなり深刻な選択といふものがつけられるといふ情況に我々がいるんだ、そういう事をあらためて強調しておきたいと思ったわけあります。新左翼が理論的なかんづく、戦略、戦術の構想の上でも、現実の運動の場面でも、したがつてまた、組

織や作風の上でも飛躍的な前進をとげなければ、70年代の非常に厳しい状況に対しては、正面から対応できないどころか、非常に無理なままで、俄然と立ち去るをえないといふような危機があるという事を確認したかったからであります。

私は、今ここで、連合赤軍の問題について批判的なコメントをつけるといった事はやめますけれども、そして、新左翼の運動が新しい段階に飛躍する所以のものとの内実について、詳細な分析や見取り図を描くという事はやりませんけれども、議論の上に上げておきたいのは、連合赤軍の問題を決して他山の石として取り扱うのではなくして、新左翼運動の議論がよほど組織的の力量と、大衆の結集力を培っていない事で、思惟し、検討し、それから前向きの教訓をひきださなければならないという事であります。私どもにとて、連合赤軍の問題といふのは、単なる倫理主義の次元で批判したり、非難したりする事はまったく論外であります。これはあくまで、政治の論理、組織運営の論理にとづいて、そして作風の問題として、戦略、戦術論理にどうであるか、組織論的に見てどうであるかといふような事、あくまでこういふ次元で検討する事は主張とするのであるが、かくように私としては、来たるべき大衆運動の高まりに対して、公然たるダブルトロットによって、あるいは、それが困難とみるや、それこそ、フックの手筋に訴えてでも、鎮圧してくるであろう事は予想されるわけであって、我々が大衆運動の一定の昂揚の容認的条件があるといふ事を言う事は、単に衆矢的に議論を進めるがためのものではなくて、瓶の反面としては、ここで一步、我々が取るならば、それこそ長い冬の時代も、あるいは、経験せざるをえないといふ事、かなり深刻な選択といふものがつけられるといふ情況に我々がいるんだ、そういう事をあらためて強調しておきたいと思ったわけあります。新左翼が理論的なかんづく、戦略、戦術の構想の上でも、現実の運動の場面でも、したがつてまた、組

は生産点を基礎とした運動と有機的に結合をとげうる事によって始めて、真に不抜の力量を發揮しなんだという事、私どもは、これはある意味ではきわめて当然の事でありますけれども、現在の新左翼が歸つている理論的、実践的を混迷といふのを考え方で考えれば、こういった原則的、あるいは、常識的な事をもう一度確認してから、出発しなければならないというふうに思います。この点において、ブントや社学同の任務といふの、私は、とくに重いと思います。私は、第一次ブントがどこでどういう限界をもつていたかと、あるいは、第二次ブントが、なぜ、いかにして解体してしまったか、これの理論的、組織的な結論をいた事は、どこで發言するつもりはありません。おそらく彼は、他の方から出でてくると思います。私として、一言、ここで申しおきたいのは、70年代階級闘争をいよいよこれから担い切つていかなければならぬ、そういう局面で、第二次ブントが解体してしまったと、これはあくまで、政治の論理、組織運営の論理にとづいて、死闘の諂ひを申しますが、死んだ子供の命を数える、そういう流儀で数え言をいふのではなくて、それこそ前向きの姿勢で深刻にこれを問題にし、理論的にも組織的にも、飛躍的な前進を実現するといふ、そういう実践的な仕方で問題にしていかなければならぬと考えます。そして、この作風が理論的にも、実践的にも、いかに困難を作りものであろうともブント、社学同は、必ずやそれを遂行してゆくといふふうに私は確信するものであります。

最初に申しあげましたように、日本資本主義は一つの転換期面にさしかかっているという事、70年代前半の日本といふものは、この転換期にいかに対処するのかといふ事をめぐって、政治的、経済的、社会的、いすれにせよ、激動を体験せざるをえない。そして、我々が日本資本主義の政治的、経済的再編と体制固めをもじことで許してしまうとする

-22-

-23-

なら、單に東南アジア諸国、その他に対する帝国主義的な支配体制の共犯者になるという城をこえて、体制の延命と権力支配の統一自ら呻吟しつつ、世界革命の歴史的任務と、そこにおいて果すべく我々に課せられている戦略的課題に答えるべきといいうべきである。日本資本主義を負う所以になつてしまふ。日本資本主義、資本主義として直面している難題、ならびにそこで志向されている転換路線といふものは、本来、資本主義体制のワク内では、其の解決が不可能なものであつて、アジャ革命、ひいては世界革命によってのみ、解決の道が拓けて開かれるものである。我々は、日本資本主義の転換路線に対して、世界革命の視野と展望の上に立つて、我々の路線を対置してゆくといふき方をしてなければならない。しかも、それを大衆のものとなしつつ、革命的実践によって、現実化してゆかなければならぬ。旧左翼は、革命の展望も、未来社会の真のあり方も、なんら積極的考え方を提示しません。たかだか、体制内的な改良派に転落してしまつてゐる。ここにおいて、新左翼は自らも旧態を脱して、新しい飛躍の道につきつつ、旧左翼から、大衆運動とその組織へのダメーニーを奪い、大衆的叛乱を単なる叛乱にとどめる事なく、それを革命へと組織化してゆく、そういう方針と組織的大義づけを整個すべく歴史的に剥削せられてゐる。情勢は、新左翼がここで述してゐる事を絶対に許さない。この情勢はまさに危機を告げているわけであります。表面だけしか見ない一部の諸君には、激励を秘めた現在の地図が聞こえないかもしない。しかし、現に、激励の時代はすでに始まっているのです。しかし、

それは、左翼的に突破するか、体制的に終息されるか、厳しい二着択一をせざる、そういう仕方で、現在の情勢といふのはあるんだ。この来るべき闘争にもし敗北するならば、我々は、それこそ、先ほど申しましたように、長い苦難の時期を耐えなければならなくなるのであります。世界革命の大事業、そこにおける、日本人民に課せられた任務という事を遂行するにおいてはなれど、自ら領じたいような情況におかれるとあります。国民總背番号制が奢々と準備されている、というような情況をここであたためて想起していただきたい。また4次防衛計画がいかに進められていくか、そして新左翼に対するキヤンペーンを採用しつつ、言論統制がいかに巧妙に進められているか、新左翼は歴史的に誤されている任務の重大さに対して、遺憾ながら、遺憾ながらです。まだ力量においてあまりにも微弱である。我々はこの冷感を現実から出済しなければならない。だが、現在の客観的情勢に鑑みてみますとならば、新左翼の運動が、大衆的な昂揚を領ゆくし、また領導すべく要請される流動的な局面が創りと近づいてゐるという事。我々が全力を傾けて進歩するならば、新左翼運動を現在の一時的な混迷と停滞から救い出せ。一步前進した確度をととのえる事が可能である。私はそう信じて疑がわないのであります。同時に、自らここに決意を新たにして、かつて、ここに結集された諸君が、異なる実践を通じて、新左翼運動の、ひいては革命的大衆闘争の最前線を担い切ってゆかれるであろうという事の確信を強く抱くものであります。

ローテ 第15号 (￥50円)

編集・発行 = ローテ編集局

連絡先 = 日本企革社
電 (200)3422